8月16日(水) 朝日新聞

ザイルの安全問い50年

元鈴鹿高専教授 石岡繁雄さん死去

小説「氷壁」の題材に

小説「氷壁」の題材にもなったナイロンザイル切断事件をめぐる原因追及に、半生をささげた元鈴鹿高専教授の石岡繁雄（いしおか・しげお）さんが、15日午前9時7分、大動脈瘤破裂のため名古屋市中村区の病院で死去した。88歳だった。通夜は16日午後7時、葬儀は17日午後0時30分から三重県鈴鹿市三日市町957の鈴鹿中央斎苑で。喪主は女婿穣さん。自宅は同市神戸2の6の25。

米国カリフォルニア州生まれ。名古屋帝大工学部卒。学生時代から登山を始め、鈴鹿市で岩稜会を創立以来、会長を務める。47年、当時は「登はん不可能」といわれた北アルプス穂高岳屏風岩正面壁を初登はんするなど、終戦直後の登山界をリードする活躍を見せた。

55年1月2日、岩稜会パーティーが北アルプス前穂高岳（3090㍍）の東壁を登はん中、実弟の若山五朗さん（当時19）の結んでいたナイロン製ザイルが切れ、若山さんが転落死した。当時、ナイロンザイルは、一般的に使われていた麻のザイルよりも「3倍強い」といわれていた。このため、登山界などからは「ザイルの結び方が悪く、ほどけたのでは」などと批判の声があがった。メーカーの公開実験でも強度を保証するデータが出た。

だが、石岡さんは疑問をぬぐいきれず、独自に実験を繰り返し、ナイロンザイルが岩角に弱いことを突き止め、メーカーの責任を追及した。

小説家の故井上靖さんが同事件に興味を持ち、石岡さんを取材。56年から朝日新聞に「氷壁」を連載し、社会的にも反響を呼んだ。井上さんは「私に『氷壁』の筆を執らしめたものは、事件そのものよりも、むしろ、その悲劇を大きく登山界にプラスするものであらしめようとする氏の志にほかならなかったと思う」と、石岡さんの熱意をたたえた。

その後も、私費を投じて実験を続けた。この執念が通産省（現経済産業省）を動かし、75年にザイルの安全基準が制定された。

同高専退職後の84年、退職金の一部で自宅に「石岡高所安全研究所」を設立。遭難死を減らすために取り組んでいた。

ザイルを手にする石岡繁雄さん＝1月17日、三重県鈴鹿市の自宅で

中日新聞

中日春秋

かつて三重県鈴鹿市の自宅で話をうかがったときの凛とした姿が鮮やかに思い出される。十五日に八十八歳で亡くなった元鈴鹿高専教授、石岡繁雄さんだ▼愛知県出身で名大工学部に学び、登山に没頭した。戦後、北アルプス穂高岳屏風岩の正面壁の初登攀に成功する。一時期は名大職員も。奨学生の選考がずさんで、受かるべき学生が落ちるのを見て微分方程式を使った新基準を半年かかって作る。「石岡の方程式」で当時の日本育英会の選考の基礎になった▼その情熱や創造性は後に山の安全に注がれた。一九五五年、北アルプス前穂高岳のナイロンザイル切断による転落事故で弟を失ったのがきっかけだ。自ら実験し、強度の高いとされたザイルも岩角に弱いと発表した。が、メーカーはザイルの権威の大学教授を立てて打ち消しにかかる…▼井上靖さんの有名な小説「氷壁」はこの転落事故がモデル。石岡さんの訴えをつづった冊子を読み「社会的にも重要な事件だ」と執筆意欲にかられたという。その後も石岡さんは実験を重ねてザイルの問題を実証し、ついに国は世界で初めてザイルの安全基準を制定した。事故から二十年後のことだ▼かつて「ことは人命にかかわる問題であり、メンツやごまかしは許されない。それが主権在民の民主主義というもの」。昨年出版の自叙伝『ザイルに導かれて』では「事件は結局、不当さを放置するかぎり社会の前進はあり得ないことを教えている」と▼大きなものや権威に屈せず、登攀を続けた半生。取材のときの穏やかな笑顔を思い出す。